＜前回＞アフリカ神学の動向

（１）アフリカとキリスト教

David Tonghou Ngong（ed.）, *A New History of African Christian Thought. From Cape to Cairo*, Rourledge, 2017.

１．サハラ以北：古代からの連続性
・アレクサンドリア（マルコがアレクサンドリア教会創設者という伝説）
・アフリカ教父：オリゲネス、テルトゥリアヌス、キプリアヌス、アウグスティヌス
・コプト正教会（Coptic Orthodox Church）、エチオピア正教会
２．サハラ以南：１５世紀以降の二つの波。
・ポルトガルの支配下でのキリスト教の導入（１５世紀）
・１７世紀からはじまり、本格的には１８世紀以降。「キリスト教宣教と奴隷貿易の二つの動機の混合」、「宗教と公共政策との間に密接な連関」→奴隷廃止の運動へ（１９世紀）。
３．多様性、しかし一つのアフリカ大陸：
・サハラ以北以南の線引きは、西欧的・イデオロギー的。「他者としてのアフリカ」。「地理的また歴史的に一体化した大陸は多くのもの共有している」（ヌゴング（David Tonghou Ngong）、2）。一つのものとしての大陸という前提でアフリカのキリスト教思想の発展を理解する試み。

（２）近世・近代以降のアフリカの歴史の中で

４．２０世紀はアフリカの成長の世紀＝キリスト教会の成長の世紀。
「ブラック・アフリカに存在していた学校や病院の大半は、宣教師たちによって経営」「多くの場合、政府からの援助もしくは奨励はほとんど無かった」（12）
「キリスト教は、新しい世界のための調節機能をもった座標系を提供」「多くの役に立つ実際的な手助け」「学校とはバプテスマのことでもあった」（13）
５．1920 年代・独立教会：independents: 1900（39,200/0.0）, 2025（228,294,600/17.6）
「一九二〇年代のミッション系教会の内部には多くの卓越したアフリカ人キリスト者がいた」（16）
「白人支配とアフリカ人の主導権との間に大きな緊張」「白人支配から離れて、純粋にアフリカ人の教会を設立しようとする動き」（19）
「ミッション系教会がますます施設に関心をもつ傾向があったのに対して、独立派は祈祷、治癒、そして極めて単純な福音宣教を自分たちの宗教生活の中心としている」（20）
６．1975 年：ほぼ西欧列強からの独立を勝ち取る
「一九七五年までにアフリカのキリスト教は、一九二五年の様相とは非常に違って見えるようになっていた。まず第一には、政治的な情況が再び根底的に変わっている」、「植民地体制は、今やほとんど至る所で消え失せてしまっている」（26）
「独立後」「人口爆発の圧迫、貧困、急速な都市化、新しいエリート達が植民地を支配した列強諸国から引きついだあの政治機構そのものの崩壊」、「教会は、このような緊張にあらゆる面に巻き込まれている」（27）
７．分裂と統一
「教派、国および言語の深刻な分裂にもかかわらずアフリカのキリスト教徒たちが感じるようになった、いよいよ募る自意識、アイデンティティを共有しているという意識をどうにか象徴している」、「多様性の内部にある統一、共通の信仰と決意」（33）
「宣教師」「彼らはこのアフリカで、一九三〇年代から一九六〇年代にかけて流行った西欧プロテスタントのエキュメニカルな正統主義に従って動いているのであるが、アフリカ人が物事を同じように見ることは滅多にない」（34）。
８．独立とモラトリアム
「宣教師の「モラトリアム」を求める声が増大」「これ以上の宣教師、これ以上の金は送ってくれるな、という提案」、「北アメリカの宣教師のサークルで驚愕を惹き起こした」（41）

（３）土着化神学：Inculturation Theology in Africa

９．西欧キリスト教とアフリカ主義あるいは文化帝国主義と文化闘争

「キリスト教諸教会の影響に対する文化闘争」「植民地時代を通じて規範的であったヨーロッパ文化にアフリカの文化的価値を対抗させようとする主張」（66）

「ヨーロッパの宣教師たちは、わずかな人々を例外として、多少なりともアフリカに価値のある文化があることをほとんど認めていなかった」、「アフリカには実際恐るべき迷信以外の、なんらかの宗教があることを否定していたのと同様」（67）

「二つの重なり合う包括的な行動規範の間に、慣例上の精神分裂症とも言うべきひとつの類型ができ上った」（69）、「文化的闘争」（72）

10．一夫一婦制？　「一夫一婦制の強要は、本質的には西欧の文化的帝国主義の一例であり、なんらの聖書的な保障もなく、実際。旧約聖書の多くの証言にも逆らって、アフリカの婚姻の慣行を非とし、ヨーロッパの伝統的な慣行をよしとするものだ、と見られている」、「しかし、どこででもキリスト教会は、知られている限り、一夫一婦制に固執するそれ自身の主張を修正したことがなかった」、「この議論は単純ではないのだ」（84）。

11．音楽。「アフリカは、歌と踊りと楽器の大陸である」、「アフリカ共有の芸術的遺産の核心部分」（85）、「第二バチカン会議」「土着語による新しい礼拝形式」「祭儀のアフリカ化の傾向」（87）

12．アフリカ神学の可能性：二つの伝統の出会いの歴史（キリスト教と伝統的宗教文化）

「疑いもなく、アフリカの神学もあるに相違ない。いや、たくさんのアフリカの神学があるに相違ないのだ。アフリカにおけるキリスト教共同体の規模、教派的経験の多様性、人間的情況の間に見られる莫大な差異、政治的、経済的圧力――こういったものすべてから、アフリカの神学的経験と表現の多元主義が要求されるのであって」

「アフリカの伝統的な宗教の、豊かで広がりをもった多様性に最もよく触れられるのは、まさに祈祷においてであり、霊的生活といっておくのが最もよい領域においてである」、「キリスト教の学者は」「あまりにも安易に、アフリカの伝統的な宗教の中に、自分が探し求めているものだけを探しあてる」（92）、「断食は、もうひとつの例である」（99）

13．世界観・医療・呪術（アフリカの伝統、聖書、西欧近代）：医療人類学的視点

「魔女根絶運動はアフリカ、特に中央アフリカを席巻している」（108）

「ルンパ教会」「二重の伝統――一方には独立教会運動の伝統、他方には魔法と呪術を根絶しようとする伝統――から生い育っており」（109）

「治癒伝道は悪霊との戦いであり、そのために彼はこの上なくきびしく断食で自らを備えた」（112）

「健康と病気についてのアフリカ的概念、聖書的概念、それに現代の西欧的概念が、衝突し合い、かつ、もつれ合っているのだ」、「いかなる社会も病気に関する理論と実際の医療行為の両方がなければ、立ち行かない」「なんらかの病気に直面すると、人間は何か実際的な行動と、その事態を説明するいっそう幅広い哲学とを共に必要とする」、「健康と病気に関するアフリカ的概念は、人々がその内側でなんおためらいもなく生きている、ただ一枚の網目の社会構造と宗教意識の、絶対不可欠の一部であった」（114）

「それが大多数の人々の生活と思考の枠組みであり続けた、社会的＝文化的体制全体の決定的な部分であっためである」、「文化のこの面が」「ある種の構造上の認知を強く求めた」

14．独立教会あるいは聖書的伝統

「独立教会の主流の力の主要な源泉と自己同一性への鍵」

「アフリカ人のキリスト教徒たちは、聖書の中に、宣教師たちによって推賞されている行動様式とは別の行動様式をうながす霊感を見出した」、「悪霊に追放、祈りによる信仰治療」（125）、「強烈なカリスマ的病気治療法」（127）

（４）解放の神学：African Liberation Theology

17．アフリカ教会と政治・国家、差別・抑圧・貧困という問題

「新生アフリカの各地で政治的指導者と教会指導者との間に生起していた関係」（137）
「それらの教会はそれにもかかわらず、他者性という核を保持しており、そことはここ数年間に生じた教会対国家の衝突が多いことによって例証される」（150）
「ますます全体主義的になっている政府はライバルには我慢がならない、もっと直接的な衝突が起こりかねない」「今日、多くの国でそれらの教会は、依然として実効ある政府統制を逃れ得る、なにほどかの大きさと威信をもった唯一の組織体である」（151）
18.「開発、和解、解放」、アフリカの黒人神学
「「開発」は、教会が教育制度に対する伝統的な把握力を失いつつあったまさにその時。教会奉仕者たちが改めて社会的、経済的プロジェクトに専念することを正当化した」（154）
「「開発」は実際。貧富の差をあまりにも無造作に大きくし易いものであり、第三世界」「では、この言葉はほとんど、悪臭を帯びるに至っている」（155）
「パウロ・フレイレ」「「意識化」の方法」（156）
「人間的利害の衝突」「弱者の側に人道主義的な援助を行いながら、同時に強者の側から仲裁者として受け入れられることは、ほとんど不可能なのだ」（156）
「一方の側がそのような弱者の立場にあるならば、キリスト教徒の第一の務は、これに可能な限り助力をすべて与えること」「和解させるよりはむしろ、解放すること、被抑圧者の背中から抑圧者を取りのけてやること」、「南アフリカの人種的なコンテキストにおいては」「闘争にコミットするほかに、開かれた進路はない」（158）
「「黒い神学」の成長」「貧困、拒絶そして苦しみの経験から生い育ったアフリカの解放の神学の成長は。その現在の、最も重要な表現であろう」（161）
19. アパルトヘイト以降（1994 年、ネルソン・マンデラ大統領、憲法制定）の黒人神学の存在意義。
20.アフリカのフェミニスト神学、Mercy Amba Oduyoye（オドゥヨイェ）

８．政治神学の現在

０．「三位的オイコノミアという装置が、統治機械の機能と分節化――内的分節化と外的分節化――を観察するにあたっていかに特権的な実験室たりうるかを示すということ」、「これらの問いを神学という次元へと回復してやることによって、西洋の統治機械の最終的構造がオイコノミアと栄光のあいだの関係のうちに見分けられるようになる」、「喝采や栄光の機能は、世論や同意といった近代的な形で、現代民主主義国家の政治装置の中心に依然として位置を占めている。」（ジョルジョ・アガンベン『王国と栄光――オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社）

（１）聖書の政治的文脈の再考

１．聖書（社会教説）から政治学（政治思想・政治哲学）への接近：
　第一点は、聖書から統一的な政治思想・政治的見解を読み取ることはできない、聖書は実に多様な政治思想を含むということ、二千年に及ぶキリスト教史から単一のキリスト教的政治思想といったものは抽出できないこと。歴史的なキリスト教は民主制・共和制だけでなく、王制・君主制とも、そして独裁制や共産主義とさえも、結びつくことができたのである。もちろん、これは特定の神学的立場から特定の政治体制を擁護することを否定するものではない。たとえば、バルトは、キリスト教的政治思想の多様性にもかかわらず、新約聖書（福音）の方向と線を民主主義的国家へと延長して語ることができた（「義認と法」「キリスト教共同体と市民共同体」）。
２．第二点は、聖書の宗教は非政治的であるといった議論の問題性。この主張が、聖書の宗教は人間の政治的営みから区別される、あるいは両者は同一ではないとの意味で述べられるのであれば、そこには一定の真理契機が認められる。しかし、新約聖書と初期キリスト教が取り組んだ事柄が個人的で内面的な心の問題であったという仕方で、聖書の宗教と

政治を分離するのであるならば、それは聖書理解にとって致命的と言わねばならない。むしろ、聖書の諸文書にはそれぞれの仕方で政治的関心が反映されており、聖書の社会教説においては、政治や国家の問題が重要な位置を占めているのである。

３．近年パウロ研究：アメリカ聖書学を基盤とした「パウロと政治」グループはパウロにおける反ローマ帝国的な政治思想を強調した議論を行っている。日本でも、宮田光雄（『国家と宗教――ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究――』岩波書店）、栗林輝夫（二〇一〇年九月一八日、立教大学で開催された日本基督教学会・学術大会シンポジウム「イエスからパウロ？」での発題）の諸氏によって注目されている。

もちろん、「パウロと政治」というテーマ自体は、たとえば、荒井献編『パウロをどうとらえるか』（新教出版社、一九七二年）などからもわかるように、日本の聖書学でもこれまで取り上げられてきた。しかし、「パウロと政治」グループの特徴は、このグループの中心的研究者であるリチャード・ホースリーが次のように要約する伝統的なパウロ理解の転換を目指す点にある。

４.「プロテスタントの解釈者たちは伝統的にパウロをユダヤ教と対立的に理解してきた。・・・このパウロの研究方法は世代を超えて新約研究を支配してきたが、それは次のようなとりわけ西欧近代的で揺ぎない前提に基づいている。すなわち、パウロの関心は宗教にある、そして宗教は政治的経済的生活から分離されるだけでなく、そもそも個人の信仰の事柄である、と。」（Richard A. Horsley（ed.）, *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004, p.1）

５．ローマ帝国こそがパウロの書簡と思想の社会的文脈であるというホースリーらの主張に対しては、ホレルが指摘するように賛否が分かれている。しかし、「ホースリーらはパウロ研究に対して重要な次元を回復させた。つまり、ローマの支配というパウロの社会的歴史的文脈におけるもっとも重要な〈所与の事実〉を焦点化したのである」とのホレルの評価は公平と言うべきだろう（David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*, Third Edition, Bloomsbury, 2015, p.172）。

６．福音書やヨハネ黙示録などの新約聖書の諸文書がそれぞれ政治的な内実を有していることを再発見した点に、現代聖書学の決定的な成果を確認することができる。

（２）「政治的なもの」――現代の政治哲学の動向から

７．政治哲学・政治思想は、現代思想の中心的な問題領域を形成しており、政治をめぐる議論はまさに活況を呈している。

８．道徳などから区別された「政治的なもの」の固有性をめぐる議論。ハンナ・アーレントとカール・シュミットの場合。

９．アーレントは『人間の条件』（ちくま学芸文庫）で政治の理念について次のように論じている。

「政治的であるということは、ポリスで生活するということであり、ポリスで生活するということは、すべてが力と暴力によらず、言葉と説得によって決定されるという意味であった。ギリシア人の自己理解では、暴力によって人を強制すること、つまり説得するのではなく命令することは、人を扱う前政治的方法であり、ポリスの外部の生活に固有のものであった。・・・家族という自然共同体は必要[必然]から生まれたものであり、その中で行なわれるすべての行動は、 必然[必要]によって支配される。これに反して、ポリスの領域は自由の領域であった。・・・ポリスにはただ『平等者』だけしかいないのに、家族は厳格な不平等の中心であるという点で、両者は区別されていたのである。」

このように、アーレントの解する政治とは、相互の説得のための言論を用いた合意形成の営みを意味しており、それはポリスが相互の平等性に基づいた自由な共同的生の形態であることに根拠づけられる。

10．シュミットの議論は次のようになる――こちらのモデルは絶対王政的な主権論である

――。

「政治的な行動や動機の基因と考えられる、特殊政治的な区別とは、友と敵という区別である」（シュミット『政治的なものの概念』未来社）、「友・敵概念は、隠喩や象徴としてではなく、具体的・存在論的な意味において解釈すべきである。すなわち、経済的・道徳的その他の諸概念を混入させて弱めてはならず、いわんや私的な個人主義的な意味で、心理的に、個人的な感情ないし性向の表現と解してはならない」、「戦争は決して、政治の目標・目的ではなく、ましてその内容ではないが、ただ戦争は、現実的可能性としてつねに存在する前提なのであって、この前提が、人間の行動・思考を独特な仕方で規定し、そのことを通じて、とくに政治的な態度を生み出すのである。」

シュミットにとって、政治とは合理的な合意形成の事柄ではなく、公的レベルにおけるの「友―敵」関係として、戦争という現実的可能性を前提としたものなのである。つまり、政治は、友・敵の闘争と社会的欲望を前提として構築された公的営みと言えよう。

11．アーレントとシュミットの相違＝「政治的なもの」を構成する二つの契機、つまり、合理的討論による合意形成と社会的欲望に連関した闘争の二つのいずれに焦点を合わせるかの違い。

非合理的な欲望・暴力と連関した闘争について、その解消不可能性を強調するのか、あるいは、その闘争の解決過程を強調するのか、によって、シュミットの主張もアーレントの主張もそれぞれ可能。「政治的なもの」は、合理的討論による合意形成と社会的欲望に連関した闘争という二つの契機を含んだ、後者から前者への公共的な努力。このように「政治的なもの」を規定しておけば、シュミットに真理契機を認めつつも、多元主義的民主主義（徹底的民主主義）を構想するシャンタル・ムフ（『政治的なものの再興』日本経済評論社）の議論を視野に入れることも可能になる。

（３）現代の政治哲学と聖書

12．現代の政治哲学における注目すべき動向：政治哲学・政治思想において聖書の政治思想への関心の高まりが見られる点。

特筆すべきは、パウロの政治思想に対する、ジョルジョ・アガンベンやスラヴォイ・ジジェクの積極的な評価であり、これはやや異なった仕方であるが、アントニオ・ネグリにおいても、確認できる。これら三者の中で、もっともまとまった、研究プログラムのレベルでのキリスト教神学との関わりが見られるのは、アガンベンであり、キリスト教思想への取り組みは本格的である。

13．パウロ研究との関わりで。『残りの時――パウロ講義』（岩波書店）が存在し――このアガンベンの背後には、ヤーコブ・タウベス『パウロの政治哲学』岩波書店、が位置している――、ローマの信徒への手紙の冒頭の「一〇の言葉」（アガンベンの趣旨からはずれるが、新共同訳では「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから」）をめぐる考察は、アガンベン政治哲学との関連はもちろん、聖書学としても示唆的。

14．「書き出しのひとつひとつの言葉が、手紙のテクスト全体を、目も眩むような総括のかたちで（やがて見るように、「総括」というのはメシアニズムの基本用語のひとつである）自らのうちに縮約しており、このために書き出しを理解することはテクスト全体の理解を意味するだろう。」

この日本語訳には、翻訳者である上村忠男と聖書学者である大貫隆との対談「アガンベンの時」が収録されており、聖書学からのコメントとしては前向きな評と言える。

15．ジジェクでは。

「パウロ的普遍性は、特殊な内容を容れる空虚で中立的な容器としての沈黙した普遍性ではなく、『戦う普遍性』、特殊の内容全体を貫通する根源的な分割というかたちとなって現れる普遍性である。」（『操り人形と小人――キリスト教の倒錯的な核』青土社）

このパウロの戦う普遍主義は、ガラテヤの信徒への手紙三章二八節「ユダヤ人もギリシア人もなく・・・」を念頭においたものであるが、ここに、さきに見た一九九〇年代以降のパウロ研究の動向（たとえば、E・P・サンダース『パウロ』教文館）を重ねることができるかもしれない。ネグリについては、獄中での思索である『ヨブ――奴隷の力』（世界書院）を指摘。

（4）政治神学という課題

16. 政治神学：聖書の社会教説の政治・国家論と現代の政治哲学とを有意味な仕方で媒介する。現代神学で政治神学と言えば、モルトマンのそれを挙げるべきであるが、それが単なる「現代」の問題ではないこと、むしろキリスト教神学の本質に関わる点を想起することは有益。

17.「神学」という学問分野・知的営み：ギリシア的思想世界→キリスト教世界（パネンベルク『学問論と神学』教文館、特に序論）。

たとえば、アウグスティヌスは『神の国（一）』（岩波文庫）：ストア哲学における神学の三区分、つまり、「詩人によるもの」（神話の神学、民衆神学）、「哲学者によるもの」（自然の神学、哲学的神学）、「国家の指導者によるもの」（国家の神学、政治神学）の三つを取り上げている。

三番目のものは、キリスト教の国教化との関連でキリスト教の知的世界に明確な仕方で導入され、キリスト教的な政治神学の伝統を構築することになる。この伝統を二〇世紀に再度取り上げたのが、シュミットである。

18.「現代国家理論の重要概念は、すべて世俗化された神学概念である。たとえば、全能なる神が万能の立法者に転化したように、諸概念が神学から国家理論に導入されたという歴史的展開によってばかりでなく、その体系的構成からもそうなのであり」、「例外状況は、法律学にとって、神学にとっての奇蹟と類似の意味をもつ。」（『政治神学』未来社）

19. しかし、このシュミットの構想した「政治神学」は、第三帝国の擁護者としてのシュミットが第二次世界大戦後に逮捕され戦争責任を問われるとともに、「いかがわしいもの」とのレッテルを貼られる。この一端は廃棄されたかに見えた学問分野を神学的に再生する試みを行ったのが、モルトマンなのである。

20. モルトマンによって意味づけ直された政治神学。「近代においてキリスト教神学が自覚的に遂行されてゆかなくてはならない分野、状況、場所、舞台を言いあらし」、「すべてのキリスト教神学に政治的自覚を呼び覚まそうと」（J・モルトマン、J・B・メッツ『政治的宗教と政治的神学』新教出版社）する神学的営み。

その後、モルトマン神学において、政治神学は中心的な位置を獲得し、神学的な分野として広く認知されるにいたっている。

21.「もし、『わたしの神学の構想』を箇条書きにまとめなければならないとすれば、恐らく、最小限次のように言うにちがいない。わたしは、

――聖書に基づいた、

――終末論的に方向づけられた、

――政治的な責任を負う、

神学を考えようとしている、と。」（『二十世紀神学の展望』新教出版社）

この「終末論的に方向づけられた」が『希望の神学』以降のモルトマン神学の基本に関わること。強調したいのは、「政治的な責任を負う」政治神学が、「聖書に基づいた」ものとして構想されている点である。

22. 一九世紀半ば以降、キリスト教思想を規定してきた「キリスト教　対　マルクス主義」の対立図式は、もはや自明ではないことを念頭におく必要がある。もちろん、この対立図式は全面的に解決されたわけではなく、理論的にも実践的にもさまざまな対立は残されている――その点で、この対立図式は、「宗教と科学」の対立というもう一つの対立図式に

比することができるかもしれない――。
23．この対立はもはや自明でない。これをよく示しているのが、さきに言及したジジェクである。ジジェクは自らの立場をラカン派マルクス主義と説明しているが、彼は次のように語ることができる。

「キリスト教とマルクス主義のあいだには直接的な系統関係があるのだ。そう、キリスト教とマルクス主義は新種の精神主義の攻撃に対して一致協力して戦うべきなのだ――真正なキリスト教の遺産はきわめて貴重なものであり、それを原理主義の熱狂者たちに預けることなどできない」（『脆弱なる絶対――キリスト教の遺産と資本主義の超克』青土社）、「レーニン的な仕事、すなわち、キリスト教共同体と呼ばれる新しい党を組織する仕事に向かう。レーニン主義者としてのパウロ。」（『操り人形と小人』）

24．「解放の神学」系におけるマルクス的な社会分析の意義を再確認すること。
Roland Boer, *Lenin, Religion, and Theology*, Palgrave, 2013.

＜参考文献＞

０．Craig Hovey and Elizabeth Phillips（eds.）, *The Cambridge Companion to Christian Political Theology*, Cambridge University Press, 2015.

Part I The Shape of Contemporary Political Theology
Mid-Twentieth Century Origins of the Contemporary Discipline
1 European Political Theology（Jürgen Moltman）
2 Liberation Theology（Miguel A. De La Torre）
3 Public Theology（Hak Joon Lee）
Political Theology and Related Discourses
4 Catholic Social Ethics（Lisa Sowle Cahill）
5 Protestant Social Ethics（D. Stephen Long）
Twenty-First Century Reimaginings
6 Postliberalism and Radical Orthodoxy（Daniel M. Bell Jr.）
7 Postcolonial Theology（Susan Abraham）

Part II Contemporary Questions in Political Theology
The contemporary Discipline and Traditional Sources
8 Scripture（Christopher Rowland）
9 Augustianisms and Thomisms（Eric Gregory and Joseph Clair）
Issues
10 Liberalism and Democracy（Craig Hovey）
11 Capitalism and Global Economics（Phikip Goodchild）
12 Political Theology as Threat（William T. Cavanaugh）
Ends
13 Good Rule（Peter J. Leithart）
14 Eschatology and Apocalyptic（Elizabeth Phillips）

芦名定道「キリスト教政治思想の可能性」（現代キリスト教思想研究会『キリスト教思想と国家・政治論』二〇〇九年、三―二六頁）。
１．Ｃ・シュミット：『政治神学』『政治的なものの概念』『政治的ロマン主義』未来社。
２．長尾龍一編『カール・シュミット著作集Ｉ 1922-1934』慈学社出版（「政治神学――主権論第四章――一九二二年」「政治的なものの概念（第二版）一九三二年」）。
『カール・シュミット著作集 II 1936-1970』慈学社出版（「政治神学 II ―

—「あらゆる政治神学は一掃された」という前節——一九七〇年」)。
３．F.S.Fiorenza/ K. Tanner/M.Welker（Hg.）*Politische Theologie. Neuere Geschichte und Potenziale*, Neukichener, 2011.
４．Graham Hammill & Julia Reinhard Lupton（eds.）, *Political Theology & Early Modernity,* The University of Chicago Press, 2012.
５．モルトマンの主要文献は、新教出版社から翻訳が出版されている（原書は、カイザー社から)。以下は、主要な（？）日本語の研究書。
・喜田川信『歴史を導く神——バルトとモルトマン』ヨルダン社、1986 年。
・組織神学研究会編『ユルゲン・モルトマン』聖学院出版会、1998 年。
大木英夫、佐藤司郎、朴憲郁、森本あんり、深井智朗
・沖野政弘『現代神学の動向——後期ハイデガーからモルトマンへ』
創文社、1999 年。
・森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』教文館、2005 年。
６．芦名定道「現代キリスト教思想における自然神学の意義」、京都哲学会『哲学研究』第 596 号、2013 年、pp.1-23。
７．ジョルジョ・アガンベン『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』以文社、2003 年。
Giorgio Agamben, Homo sacer: Il potere sovrano e la nuda vita, Torino, Einaudi, 1995.
（Giorgio Agamben, Homo sacer. Sovereign Power and Bare Life, translated by Daniel Heller-Roazen, Stanford University Press, 1998.）
↓
アガンベンの聖書解釈
『残りの時——パウロ講義』上村忠男訳、岩波書店、2005 年。
『アウシュヴィッツの残りのもの——アルシーヴと証人』上村忠男訳、月曜社、2001 年。
８．ジョルジョ・アガンベン『王国と栄光——オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社、2010 年、『いと高き貧しさ——修道院規則と生の形式』みすず書房、2014 年、『身体の使用——脱構成的可能態の理論のために』みすず書房、2016 年。
９．Colby Dickinson, *Agaben and Theology*, T & T Clark, 2011.
10．芦名定道「現代思想と〈神〉の問い——ティリッヒからジジェクまで」、『理想』2012. No.688、40-52 頁。